

Y06a 公開天文台に関するアンケート調査の中間報告

川端哲也(美星天文台)、石田俊人、森淳(西はりま天文台)、小関高明(星の子館)、小野智子(国立天文台)、久保庭祐子(美スターボランティアの会)、安田岳志(姫路科学館)

天体観測設備を持ち、天体観望会など公開業務を行っている施設「公開天文台」は、1980年代後半より急激に増加し、1990年代に入ってから口径1mを超す望遠鏡を持つ施設の設置が相次いだ。これら公開天文台の設備、仕様、事業概要、運営体制などの基礎情報は、1997年までに兵庫県立西はりま天文台公園が中心となって調査が行われ「公開天文台要覧」としてまとめられた(黒田武彦他1994, 小野智子他1998)。1997年以降、こうした調査はなされていないが、市町村合併による行政の枠組みの変化や指定管理者制度の導入など、公開天文台を取り巻く環境は、急激に変化している。

こうした社会情勢の変化の中、公開天文台の発展を目的として日本公開天文台協会が組織され、全国の公開天文台の現状を把握するためにアンケート調査を実施し「公開天文台白書」を作成することになった。我々は、調査対象を「公開を目的として設置された、据え付け型及び移動型望遠鏡設備を有する施設」とし、4月中旬に全国の394施設に対してアンケートを送付し、6月中旬までに205件の回答を得ている。

アンケートは2部構成で、前半部は施設の利用者にとって必要な情報(開館時間、設備、観望会、宿泊など)を尋ね、後半部は非公開情報として運営について(位置づけ、立地条件、利用者、観望会の形態、バリアフリー環境、望遠鏡の利用、職員体制、市町村合併、指定管理者制度、施設の評価など)を選択形式で尋ねている。

講演では、このアンケート調査の中間報告として、現在の公開天文台の実態を報告する。